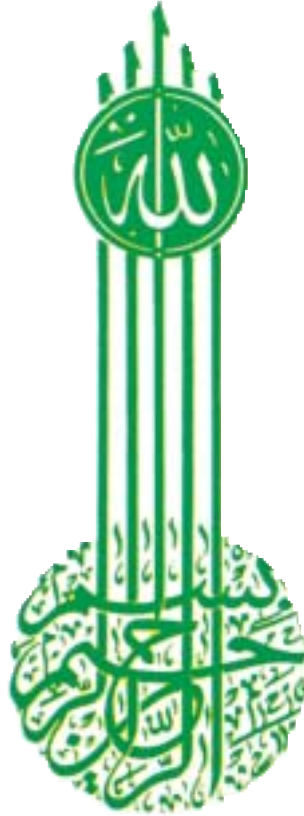


伝統ある若き近代国家  
A Young Modern Country with Rich Tradition

# サウディアラビア王国





上記はアラビア語で“慈悲深く慈愛あまねきアッラーの御名において”の意味



サウディアラビア王国建国の祖  
アブドルアジーズ・ビン・アブドッラハマーン・アール・サウード国王





二聖モスクの守護者  
ファハド・ビン・アブドルアジーズ・アール・サウード国王





皇太子兼副首相兼国家警備隊司令官  
アブドッラー・ビン・アブドルアジーズ・アール・サウード殿下





第二副首相兼国防・航空相兼監察長官  
スルターン・ビン・アブドルアジーズ・アール・サウード殿下



## 巻頭言

サウディアラビア王国と日本の外交関係は半世紀前に遡る1955年に樹立され、爾来、両国関係は政府の力強い後押しにより様々な分野において継続的な発展を遂げてきた。今や日・サの関係は、相互理解と協力の面で世界の模範となっており、商工業をはじめ、文化、教育などあらゆる重要分野において、両国の絆はさらに強化・拡大を続けている。日本はサウディアラビアにとって最大級の貿易パートナーとして輸入面では米国に次ぎ第2位の座を占め、2000年におけるサウディアラビアの日本製品輸入額は約118億5,000万リヤール（約31億6,400万ドル）に達している。一方、サウディアラビアは石油、石化製品を日本に輸出しており、その量は年々増加の一途を辿っている。1975年に締結された両国政府間の経済技術協力協定に基づいて設置された「日本・サウディアラビア合同委員会」の多大な努力により発展を遂げてきた両国関係は、1998年10月の副首相兼国家警備隊司令官アブドッラー皇太子殿下の日本公式訪問により一層強化された。



両国の共通利益の実現のためには、投資の促進が不可欠であるが、深い相互理解と協力があって初めてそれが可能となるのである。

本書は、サウディアラビア王国の現況とその文化、ならびに二聖モスクの守護者ファハド国王とアブドッラー皇太子殿下の指導により王国が成し遂げた発展と近代化の姿を、親愛なる日本の皆様に紹介するために出版されたものである。

サウディアラビア国民が敬意を抱く日本の皆様が、本書によってサウディアラビア王国を正しく理解されることを切に願うものである。

本書の出版に際し、多大な協力をいただいた日本サウディアラビア協会小長啓一会長ならびに同協会関係者に対し、深甚なる謝意を表する次第である。

サウディアラビア王国文化・情報大臣  
ファード・ビン・アブドッサラーム・アルファールスイ

2004年2月、リヤード

“ アラビア ”、この言葉の響きには夢がある。そのアラビアで製作され、シルクロードを伝い、中国を經由して日本に到来した文物のいくつかが、今も正倉院に眠っている。



そのアラビア半島が大きく動いた時代、第二次世界大戦に敗れた我々が、国際社会から切り離されていた時代に、中東世界は大きく変化を続け、新しい国を次々に誕生させていた。石油資源を見つめる超大国同士の駆け引きの続く中、よちよち歩きで国際社会に復帰したばかりの日本はひたすら石油にキーワードを求めている。

その中にひときわ目を引いたのが“ サウディアラビア ” 建国であったことも事実。

1980年代、私は癌センターをサウディアラビアに建設するため、初めてこの国を訪問した。“ 石油だけ ” と言われる両国関係に違った切り口での友情を育てられないか？ というのが当時の私の夢だった。その夢は今も変わらず私の胸の中で燃え続けている。

総理大臣在職当時、経済以外の分野でも、二国間関係を強化したい、そんな思いの中で「日本・サウディアラビア協力アジェンダ」が現実に向けて動き始めた。この流れを引き続き加速させてゆくことが今、私の“ 夢 ” である。

衆議院議員（元内閣総理大臣、首相外交最高顧問）  
橋本 龍太郎

2004年2月

サウディアラビア王国は本書のサブ・タイトルが示すように「伝統ある若き近代国家」である。同国は1930年代の石油発見とともに急速な発展を遂げたが、同時にイスラームとアラブ社会の慣習を保持しつつ国際社会における重要な位置を占めている。



2005年に両国は外交関係樹立50周年を迎えるが、この半世紀の間に両国の相互理解は深まり、密接な補完関係を築き上げることができた。従来の石油を中心とした良好な経済関係に止まらず、投資、技術移転の分野での一層の拡大が期待されている。

互いを知ることが友好の精神を涵養する第一歩であるが、1966年に始まったサウディアラビア航空の観光ツアーによって、それまでは我々日本人にとって遠い砂漠と石油の国というイメージしかなかったサウディアラビアが身近な存在となり、日本国民の間に王国に対する正しい認識が急速に広まりつつあることは大変喜ばしいことである。

本書がサウディアラビア王国を知るための良き道しるべとなり、政治、経済、文化などあらゆる分野における交流がさらに深まることを切に期待している。

日本サウディアラビア協会会長  
小長 啓一

2004年2月

# 目 次

巻頭言	XI
国旗と国章	XXI
国旗	XXI
国章	XXII
第1章 風土と宗教	1
1 国土と人口	2
(1) 国 土	2
(2) 人 口	4
2 気 候	7
3 宗 教(イスラーム)	9
(1) 預言者ムハンマドの生涯	9
(2) 六信五行	10
(3) イスラーム暦	16
(4) 宗教行事と祝祭日	17
第2章 サウディアラビア王国建国の歴史	19
1 サウード家の台頭	20
(1) ムハンマド・ビン・サウードとイブン・アブドルワッハーブ	21
(2) サウード侯国	22
2 サウディアラビア王国の建国	25
(1) アブドルアジーズ国王の誕生と成長	25
(2) クウェイトでの生活	26
(3) リヤード奪回 - 歴史に残る大奇襲 -	28
(4) アラビア半島統一とサウディアラビア王国の建国	34
3 アブドルアジーズ国王と近代国家への歩み	43
(1) 国家の基礎固め	43
(2) 石油時代の幕開け	45

(3) 第2次世界大戦とアメリカの接近	49
(4) 国内開発	51
(5) 砂漠の英雄の逝去	52
<b>第3章 歴代国王の治世</b>	<b>53</b>
<b>1 サウード第2代国王</b>	<b>55</b>
(1) スエズ動乱	55
(2) OPECの創設	55
<b>2 ファイサル第3代国王</b>	<b>56</b>
(1) 内政基本政策10カ条と開発5カ年計画の開始	56
(2) 第4次中東戦争と石油武器戦略	57
(3) アラブ・イスラーム世界の盟主	58
<b>3 ハーリド第4代国王</b>	<b>59</b>
(1) 近代化路線の継承	59
(2) 石油産業の国有化	59
(3) 湾岸協力会議の設立	60
<b>4 ファハド第5代国王</b>	<b>61</b>
(1) ファハド国王の登場	61
(2) 中東和平8項目提案	62
(3) 二聖モスクの守護者	62
(4) イラクのクウェイト侵攻と湾岸戦争	63
(5) 新たな統治制度の導入	67
(6) サウディアラビア王国建国100年祭	67
(7) 近代国家の誕生	69
<b>第4章 政治</b>	<b>71</b>
<b>1 政治体制</b>	<b>72</b>
(1) 君主制	72
(2) 憲法	72
(3) 閣僚会議	73

(4) 諮問評議会	76
(5) 地方行政	77
2 外交	78
(1) 基本政策	78
(2) アラブ・イスラーム諸国との連帯強化	78
(3) 中東和平問題	80
(4) 国際協調と対外援助	81
(5) テロリズムとの戦い	82
3 イスラームへの貢献	83
(1) 二聖モスクの拡張	83
(2) ファハド国王聖クルアーン印刷発行総局	86
(3) イスラミック・センター、教育施設、モスクの建設	87
第5章 経済と産業	89
経済	90
1 経済の特徴	90
2 開発計画と経済発展	90
3 経済改革	92
(1) 民営化	92
(2) サウディ人化	94
4 財政	96
5 金融	97
(1) 金融機関	97
(2) 株式市場	98
6 貿易	99
産業	101
1 石油・ガス産業	101
(1) 確認埋蔵量	101
(2) 生産量	101
(3) 基本政策	101

(4) 最高石油・鉱物評議会	103
(5) サウディアラムコ	104
2 工業開発	106
(1) ジュベイルとヤンブーの両工業都市	106
(2) サウディアラビア基礎産業公社	108
(3) 工業団地	111
3 農業開発	111
(1) 耕地面積	112
(2) 主要農作物	113
4 鉱工業	114
第6章 近代国家	115
1 社会基盤整備	116
(1) 道路	116
(2) 電力	118
(3) 造水	119
(4) 通信	121
(5) 空港	122
(6) 鉄道	123
(7) 港湾	123
2 医療・保健サービス	124
3 社会開発・福祉サービス	127
4 教育	128
5 文化・民族遺産	130
(1) キング・ファイサル国際賞	130
(2) 青年福祉庁	132
(3) サウディアラビア文化・芸術協会と文化クラブ	132
(4) 民族遺産・文化フェスティバル(ジュナードリーヤ・フェスティバル)	133
(5) 民衆芸術	135
(6) 手芸	137

6	スポーツ	138
7	サウディアラビア社会と生活	140
	(1) 家族	140
	(2) 結婚	141
	(3) サウディ社会の女性と役割	143
	(4) 習慣と伝統	144
	(5) 言語	146
	(6) 勤務時間と公休日	148
	(7) 通貨	148
	(8) 住宅	149
	(9) 食事・レストラン	151
	(10) 買物	155
	(11) ラジオ・テレビ・新聞	156
	(12) 国内観光	157
第7章	日本・サウディアラビア両国関係	161
1	交流の始まりと外交関係の樹立	162
	(1) 日本人ムスリムによるマッカ巡礼	162
	(2) 東京モスクの開堂	162
	(3) 横山公使のサウディアラビア訪問	163
	(4) 外交関係の樹立と大使館の開設	163
	(5) 外交樹立50周年	165
2	経済技術協力	166
	(1) 日本企業の石油利権獲得	166
	(2) 日本・サウディアラビア経済技術協力協定の締結	168
	(3) 日本・サウディアラビア合同委員会	170
	(4) 国際協力事業団・リヤード事務所の設立	170
	(5) リヤード電子技術学院の開校	171
	(6) 日本・サウディアラビアビジネスカOUNシル	172
	(7) 21世紀に向けた包括的パートナーシップ	173

(8) 日本・サウディアラビア協力アジェンダ報告書など各種協力文書に調印	174
(9) 自動車技術者研修所の設立	175
(10) 日本貿易振興会・リヤード事務所の開設	175
(11) サウディアラビア投資促進機構の設立	176
(12) 日本・サウディアラビア間の貿易	178
<b>3 日本・サウディアラビア間の文化・教育・スポーツ交流</b>	<b>178</b>
(1) 文化交流	179
(2) 教育交流	182
(3) スポーツ交流	185
(4) 2005年日本国際博覧会（愛知万博）	190
<b>4 日本・サウディアラビア両国要人交流</b>	<b>190</b>
(1) ファイサル国王の訪日（1971年5月）	190
(2) 皇太子明仁殿下（現天皇陛下）ご夫妻のサウディアラビア訪問（1981年2月）	192
(3) 皇太子徳仁殿下ご夫妻のサウディアラビア訪問（1994年11月）	193
(4) アブドゥラー皇太子殿下の訪日（1998年10月）	195
(5) 要人の相互訪問	197
<b>5 日本サウディアラビア協会の活動と日本サウディアラビア友好ファハド基金</b>	<b>203</b>
<b>資料</b>	<b>207</b>
1 統治基本法	208
2 諮問評議会法	216
3 地方行政法	220
4 サウディアラビア年表	226
5 参考文献	230
<b>地図・系図</b>	
1 現在のサウディアラビア王国（地図）	xx
2 サウード家系図：	
第一次（1745-1818）、第二次（1824-1891）サウード侯国	24
3 アブドルアジーズ初代国王の子息たち	54



首都：リヤード	面積：214万9,690km <sup>2</sup> (日本の約5.7倍)
人口 (2000年サウディ政府統計)：2,085万人 (サウディ人：1,559万人、外国人：526万人)	
民族：アラブ人	国語：アラビア語
	宗教：イスラーム教
	政体：君主制

## 国旗と国章



### 国旗

サウディアラビア王国の国旗は、「統治基本法」の第3条にて、次のように定められている。

#### 第3条：国旗

- (1) 色は緑色とする。
- (2) 縦の長さは、横の長さの3分の2とする。
- (3) 国旗の中央に、“la ilah illa Allah Muhammad rasoul Allah” と表記し、その下に、剣を置き、半旗にはしないものとする。

国旗の中央のアラビア語は、イスラームにおける信仰の告白の言葉、「シャハーダ」で、「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒なり」との意味である。また剣は正義を、旗地の緑色は繁栄を表している。国旗は日の出から日没まで、すべての政府省庁・公共機関の建物および同国の在外大使館と領事館に掲揚されるほか、国家の重要行事の際にも掲揚される。国旗を半旗にしてはならないとの規定は、シャハーダを汚さないためであり、従って、国旗を地面または水につけたりすることも禁じられている。



## 国章

国章もまた、統治基本法第4条にて、次のように規定されている。

### 第4条：国章

国家の国章は、交差した2本の剣とその交差の上部に椰子の木を置いた図柄とする。また、法令にて国歌と勲章を定めるものとする。

剣は力と忍耐を表し、椰子の木は生命力、生長、繁栄を象徴している。



サウード王家発祥の地、ディルイーヤ（リヤード）